19世紀後半アメリカにおける「科学的」女子高等教育論争の展開

A Study on the "Scientific" Argument Concerning Women's Higher Education in America in the Late Nineteenth Century

横山美和

This article examines the "scientific" argument concerning women's higher education in late nineteenth-century America. *Sex in Education; or, A Fair Chance for the Girls* (1873) written by Edward Hammond Clarke, a physician and professor at Harvard Medical School, generated controversy because it said that higher education or co-education could be harmful to women's health from a physiological perspective. Because his experience as a physician and scientific knowledge were greatly admired, his essay had a real impact on women's higher education. However, many of his opponents criticized his aggressive explanation of the link between women's higher education and the ill health of American women; the evils of insufficient education; his way of applying and interpreting natural law; and his hasty generalization of few cases ignoring actual experiences of women. Dr. Mary Jacobi and the Association of Collegiate Alumnae published questionnaire surveys on the health of women graduates and proved that Clarke's argument was unreasonable.
Key words : "Scientific" Argument on Women's Higher Education　Edward Hammond Clarke　The Nineteenth Century

ボストンの著名な医師でありハーバード・メディカル・スクール教授であったエドワード・ハモンド・クラークの『教育における性別、あるいは、女子のための公平な機会』(1873) は、生理学的観点から女子高等教育や共学教育が女性の健康に有害であるとし論争を巻き起こした。彼は支持者から医師としての経験と科学的知識を高く評価され、その教育論は実際に女子大学や共学大学に影響を与えることとなる。しかし、クラークの教育論に対し多くの反論者は、女子高等教育と健康悪化の強引な関連付け、教育不足による害、エネルギー保存則のような自然法則の適用と偏った解釈、また女性の経験を無視した少数事例の早急な一般化等の問題を指摘した。のちに、医師メアリ・ジャコービや大学女子卒業生協会は女性の健康アンケート調査報告書を出版し、クラークの教育論は、実際の女性たちの経験に照らした社会的調査によって事実にそぐわないことが証明されることとなった。
キーワード：「科学的」女子高等教育論争　エドワード・ハモンド・クラーク　19世紀

1. はじめに

科学言説が「性別」を構築する様相を明らかにすることを研究課題として、筆者は、先に19世紀後半のアメリカにおいて議論を巻き起こしたテキストについて論じた（横山 2007）。そのテキストとしては、ボストンの著名な内科医であり、ハーバード・メディカル・スクールの薬物学教授でもあったエドワード・ハモンド・クラーク（Edward Hammond Clarke, 1820-1877）の『教育における性別、あるいは、女子のための公平な機会』(*Sex in Education; or, A Fair Chance for the Girls*, 1873) であり、同書は1870年代、女性の高等教育進出の是非に対して、一種の「科学的」な反対論の引き金を引いたと言われている[1]。クラークの女子高等教育論は、知的活動は女性の生殖器の発達に必要なエネルギーを奪うとし、男子と同じ方法の教育ではなく、女性の特性に見合った教育方法の導入を促すものであった。クラークは当時流行のエネルギー保存則を生理学に援用して性別の非対称性を強調したのであり、「科学言説」を用いて「女性」という性別を再定義したといえる。

先述の論文に次いで本論では、このクラークの書がどのように社会に受け止められ、またどのような論点で議論が展開されたのかを明らかにするために、クラークの主張に対し、敏感に反応したフェミニストたちや、医師メアリ・ジャコービ（Mary Putnam Jacobi, 1842-1906）の反論書、大学女子卒業生協会（The Association of Collegiate Alumnae）の調査報告書などのテキストの考察を行いたい。

2. 『教育における性別』の影響と支持者の評価

まず、クラークの教育論の論旨を述べ、それが社会に与えた影響と、どのような点が評価されたのかを簡単に見ておきたい。

2-1. 『教育における性別』の論旨

クラークは、「女性の領域という問題は、良い、悪いという抽象的な原理を適用することによって解決されない。その解決は、生理学から得られるべきであり、倫理や形而上学からではない」(Clarke 1874, 12) とし、当時盛んになっていたいわゆる「女性問題」(Woman Question または Woman Problem) の議論の中の、女性の社会進出、高等教育進出などの議論について、倫理などの観点からではなく、「生理学」の観点から論ずるべきだとしている。

クラークによれば、女性は思春期（初潮から20才くらいまでの間が想定されている）に月経によって生殖器を成熟させていくという。クラークにとってその期間の月経は、血液によって生殖器に 'force'、つまりエネルギーを運び発達させることと、排卵すること、そして古くなった細胞を対外に排泄する機能を持つ生理現象であった。さらに、周期的で健やかな月経を確立するには、月経を司

る神経系に十分なエネルギーを与えることが必要であった。月経期間は、身体のもつエネルギーは月経機能の遂行に優先的に与えられるべきであって、その他の活動、特に多くのエネルギーを必要とする知的活動に割り当てられるべきではないため、女性は学業を軽減するべきである。もし知的活動にエネルギーを注ぎすぎ、月経機能のためのエネルギーが不足すると月経過多や無月経などの病が引き起こされ、その病は全身の健康にまで影響を与える。月経のある女性とない男性とではエネルギーの消費のされ方が異なるのであるから、女性の健康を保つために男女は別学にするべきである。さもなければ女性の生殖器の発達は妨げられることから高等教育を受けられる階級である白人中産階級の出生率が下がり、国家の利益に反するというのがクラークの主張の趣旨である（Clarke 1874）。

2-2. 大学教育への影響

クラークの書は13年間に17版まで出版されるほどのベストセラーとなり[2]、社会的影響は少なくなかった。実際に、女子学生を抱える大学の体制に変化を与えた。特に女子大学はクラークの警告を非常に深刻に受け止めたとされる。1865年創立のヴァッサー・カレッジでは対策として、入学志願者を知的能力だけでなく身体の健康でも選別するようになり、勉強時間を制限し、学生に運動を命じた。1885年に開校したブリンマー・カレッジでも教室にいる時間の制限や、衛生学の講義、医師の管理の導入、戸外での運動、衛生状態の管理によって学生の健康を守り向上させる方針がとられた（Newman 1985, 57）。ブリンマーの第2代学長カレー・トーマス（M. Carey Thomas, 1857-1935）は「あの頃私たちは、エドワード・クラーク医師の『教育における性別』の暗い亡霊の、鳴り響く鎖につきまとわれていた」[3]と回顧しているように、教育者と女性たちは彼の警告に非常に不安を覚えていたことが窺われる。

共学化を検討していた大学にもその影響はあった。例えばニューヨークのコロンビア大学では、社会科学教授ジョン・バージェス（John W. Burgess, 1844-1931）を筆頭として共学反対者が多く、正規の女子学生を認めなかった[4]。バージェスは女性がコロンビア大学の知的レベルを落としかねないということを憂慮していたが、それは女性は身体的な違いから男性と同じように継続的に学業をこなすことができないというクラークの論を信頼していたからであった（Rosenberg 1999）。

2-3.「科学的」知識と「医師の診察経験」に基づく評価

クラークの言説は、なぜそれほどの影響があったのだろうか。それを探るには、彼の何が評価されたかを見ておく必要があるだろう。まず一般誌のレベルでは、アトランティック・マンスリー誌は、

> …恐らくこの国でクラーク医師の意見ほど重要なものを持っている人間はいない。円熟した年齢、冷静な判断のできる性質、多様な経験に導かれていて、そして地域から認められたアメリカ開業医の中でもトップクラスにいる彼自身の職業としての、重大問題にかかわる彼の証言は、臨床上の証拠に支えられている…（*Atlantic Monthly* 1873）。

と彼の医師としての経験を評価した。一方ギャラクシー誌では、「クラーク医師は、この話題［教育における性別］についての小冊子の中で、従来ほとんど科学的原理に参照して扱われてこなかった問題について、科学の成果を非常に印象的な方法で指摘した」（Youmans 1874, ［　］内筆者補足）とし、「科学的な原理に即している」という前提に重きを置いている。

医学雑誌ニューヨーク・メディカル・ジャーナルでも、

> ここ数年の膨大な女子教育についての議論では、問題は大いに医学的なものであり、医学的知識と経験から考慮されるべきであることがほとんどの場合忘れられているようだ。クラーク医師は現場でそのことをきわめてはっきりと認識しており、アメリカ女性の健康への深刻で高まる危険と、非道な女子教育がもたらす破滅的な結果に対する経験によって彼は導かれている（*New-York Medical Journal* 1873）。

というように、医師としての知識と経験によって高く評価されていることがわかる。

クラークはその書の中で、自らの臨床経験から7人の女性の例を示し、彼女たちのライフヒストリーを詳細に描いた。いずれもクラークの元へ相談に訪れた若い女性で、月経過多、無月経、神経の未発達といった症状を抱えていた。クラークは彼女たちが月経の時に休息せずに、男性と同じように勉学や仕事をしたために、月経の機能以外にエネルギーを注ぎすぎたことが病の原因であると診断している。その臨床医ならではの経験に裏打ちされているという描写は、彼の病の原因分析に正当性があると信用させるのに大いに役立ったようである。

しかしながら、人々はクラークの月経についての科学的説明については無批判にただ信用しているというしかない。当時月経のメカニズムや役割、機能については、誰もまだよくわかっていなかった。例えばクラークは月経の機能の一つに排卵を起こすことがあると考えているが、これは当時確認されていなかった。19世紀は、多くの研究者が月経の直後に排卵が起こると予想していたため（ラカー 1998, 250,284）、恐らくクラークも月経と排卵の関係性を時代的状況からこのように考えていたと推測することができる。批判者の一人である医師ジャコービは伝統的に月経についてより多くの説があるとしているが、当時はまだ医学界でも月経の役割と機能についての合意がなかったことが、クラークの発言を可能にしていたし（Zieff 1994, 183-186）、大衆の側もそれを疑うことなく信じたのであった。

一方、クラークの論は同時代の医師にも支持を受けている。イギリスの著名な精神科医ヘンリー・モーズリー（Henry Maudsley, 1835-1918）は、クラークの書物を引用しながら、教育による女性の健康被害について論説を出した。女子にとって過度な教育上の緊張は健康に有害であり、月経を無視して休息をとらずに勉学を続ければ、将来母性に影響が出るというクラークの主張を大いに支持している（Maudsley 1874）。但し、モーズリーの場合は男女の脳の違いが前提にあり、クラークは脳の違いは主張しておらず、ただ月経によるエネルギーの消費のされ方が男女で異なるという前提がある。若干二人の根拠は異なるものの、生理学的な観点から、月経を無視した、男性と同じ教育方法が女性の生殖にかかわる健康に有害だという部分は一致している。また、クラークのハーバードでの同僚であった医師・生理学者オリヴァー・ウェンデル・ホームズ（Oliver Wendell Holmes, Sr., 1809-1894）も、「学部の会議では［クラークの］意見は常に尊敬をもって聞かれた」と紹介しているように（Clarke 1878, xix）、彼の発言は医学界においても非常に尊重されていた。

上記のように、クラークの主張は彼の医師としての経験と、生理学という科学的な知識にのっとっているらしいという点から評価されていることがわかる。後述するように、彼の証言について科

学的であるのかという点には多くの疑問が出ているものの、「科学らしさ」とでもいうべきレトリックに多くの人が惹かれたことがわかる。その背景として、19世紀後半のアメリカ社会では、科学が神学に並ぶ新たな「価値」として信頼を得始めていたことに大きな原因がある。医学史家エリザベス・フィーによれば、チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin, 1809-1882）の『種の起源』（*On the Origin of Species*, 1859）をめぐる大議論が1つの象徴的なイベントとなり、19世紀後半になると科学の地位が次第に向上したという（Fee 1976, 178-180）。フィーはこの時代の「女性問題」にまつわる膨大な資料を調査し、いかにこの時代に「科学と女性問題」が大きな関心事となっていたかを示したが（Fee, 1978）、女性の社会進出に伴って、その是非についても科学の観点から盛んに論じられるようになったことが窺える。生理学という一種の科学を議論の中核に据えることによって、時流にのってクラークの論は一定の支持を得たのである。

3. クラークの「科学的」女子高等教育論に対する批判の論点

高等教育を目指す女性たちにとって、女性の権利よりも階級や国家を優先し、女子高等教育があたかも自然の法則に反することのようなクラークの主張は、到底受け入れられるものではなかった。男性と同じ教育方法をとることで月経時に休息ができず、知的活動へエネルギーを注ぎすぎることは健康に有害とするクラークの仮説への反論は次々と出現した。教育に関連する、ジェンダーと科学の問題から論点の中でも、複数に共通してあがっていた以下の4つを見ておきたい。

3-1. アメリカ人女性の健康と気候条件の影響

1つは、アメリカの気候と女性の健康の関連の問題である。そもそも、アメリカ人女性は他国の女性に比べてか弱く、月経に関する困難も多いというのが当時の一般的な見解であったが、クラークはその原因を女性の高等教育に帰している。クラークは「我々の少女ための学校やカレッジの教育方法が、大体において、アメリカ女性を悩ます『千の病』の原因となっていると言われている」（Clarke 1874, 22）とし、先進国であった女子の高等教育と女性の病弱さを結びつけている。しかし、女子高等教育が始まったばかりの1830年代[5]にはすでに、イギリス人著述家として知られるハリエット・マーティノー（Harriet Martineau, 1802-1876）はアメリカを旅行した際、女性たちの病弱な様子に非常にショックを受けたというエピソードがある（*Nation*, 1885）。すなわち、女性の高等教育が本格的に始まる以前よりアメリカ人女性の病弱さは認識されていることになり、女子高等教育の発展と女性の病弱さを結び付けているのは強引ともとることができる。

また、当時は一般的にも、科学界においても、月経は気候に影響を受けると考えられており、アメリカは気候が厳しいので女性の月経と健康に影響が出ているという説が多くの人の支持を受けていた。月経の研究で有名であった同時代の医師ホワイトヘッド（James Whitehead, 1812-1885）は、ヒポクラテスやガレノスの時代より気候が月経血の量に影響を与えることが知られており、温かいほど月経血の量が多いとされていたと述べる。さらに、イギリスに住んでいたある女性は18才になるまで不定期に数回しか月経が来なかったが、18才になりインドに住むようになったら月経が順調になったという。しかし、イギリスに戻ると再び月経が不調になったという例を紹介し、気候が月経の調子に大きな影響を与えることをホワイトヘッドは示唆している（Whitehead 1854,40）。クラークはあくまで病弱さの原因は「気候［の違い］だけでは十分説明ができない」（Clarke1874, 167-168）としているが、フェミニスト著述家のジュリア・ウォード・ハウ（Julia Ward Howe, 1819-1910）や教育家アンナ・ブラケット（Anna C. Brackett, 1836-1911）、大学女子卒業生協会の健康統計委員会委員長アニー・ハウズ（Annie G. Howes, 不明）など多くの女性やクラークへの批判者たちは気候の厳しさがアメリカ女性の病弱さの原因であることを支持している。彼女たちは気候条件という地域的問題を無視し、他国に先駆けて発展した女子高等教育と女性の健康を強引に結びつけていると批判した。

3-2. 教育不足による女性の健康への害

2つ目は、クラークの論とは反対に、教育を受けないことによる無知や不十分な体育教育が健康を害するのだという論である。クラークは「我々の現代文明においては、教養のある階級は教養のない階級よりも小さな家庭を持って」（Clarke 1874, 138）おり、「未来へと続く、次々と生まれる生命はアメリカ人というよりケルト人となり、その生命は炭坑夫から生まれるのであり、貴族からではない」（同上 140）とし、教育が白人中産階級の出生率に与える害悪について訴えた。また、「［月経の］無視のせいで、世代ごとに、遺伝的伝達の法則に従って、先祖より弱くなっている」（同上 27）とし、女性が次第に退化しているとさえ主張した。高等教育を受けている階級、つまり白人中産階級以上ほど出生率が低いこと引き合いにし、高等教育が女性の身体を退化させ、生殖能力へ影響を与えていると警告したのであった。

社会的背景として、1859年にはダーウィンの有名な『種の起源』が、1871年に『人間の由来』（*The Descent of Man*）が出版されたが、アメリカではアングロサクソン系の白人が減少し、その他の地域のヨーロッパ系の移民や黒人が増加することによる逆淘汰の問題に多いに関心が寄せられていたことがあった（Newman 1999, 88-89）。

それに対し、画家であり著述家でもあったデュフィー（E. B. Duffey, 1838-1898）は、死亡率が改善されていることと、平均寿命が延びていることを指摘している。むしろ女性は教育を受けて健康で長生きするようになり、多産により命を落とす危険も減ったとする（Duffey 1874, 31-32）。さらに、医師のアンナ・マニング・コンフォート（Anna Manning Comfort, 1845-1931）と、ニューヨーク・シラキューズ大学美術校長ジョージ・F・コンフォート（George F. Comfort, 1833-1910）は、解剖学や生理学、衛生学を学習することが健康に過ごすことにつながるとした（G.F.Comfort and A.M.Comfort 1874, 77-78）。加えて、ヨーロッパに比べてアメリカの女性が屋外で活動しないことが不健康の原因であり、学校に通って適切な体育教育を受けた女性のほうが、家に留まっている女性よりも体力に勝ると述べている（同上 79、98-99）。またハウズは、先祖の女性たちの衛生学の知識の欠如がどれくらい子孫の身体的虚弱さに影響を与えているかを見積もることは難しいとしながらも、Old Englandの女性たちの生活の記録を見ると、無知ゆえに自然に逆らいしばしばその罰に苦しんでいるとする（Howes 1885, 7）。よって、女性を教育から排除するのではなく、むしろ衛生学に適った生活を送るために教育が必要であるという主張が窺える。

すなわち、ここには、出生率の低下という社会問題について、逆淘汰という社会的不安を背景に、原因分析とその影響についての解釈に男性医師のバイアスがあるのではないかということになるだろう。白人中産階級の出生率が下がっていることは事実でも、死亡率

や平均寿命を無視して、民族や階級の構成比の問題を考えることはクラークの不安から見ると理屈に合わない。また、教育が女性の健康を悪化させるという主張には、結果的に女性を知識から排除しなければならないということが含まれる。教育を受けた世代のほうがむしろ健康的な生活を送っており、衛生学などの自らの身体に対する知識が女性の健康を守るのであれば、教育の阻害による知識からの排除は適当ではない。クラークの主張には、議論の対象が女性の身体の健康であるのに、まさしくその身体を持つ者が知識から排除され、阻害されるという問題をはらんでもいる。男性医師による女性の身体に対する知識の専有化と、女性の無力化を固定化し、知と権力の構造の硬直化と再生産の問題にも繋がるものである。

3-3. エネルギー保存則適用への解釈

3つ目は、クラークの論の骨子でもあるエネルギー保存則の適用の問題である。エネルギー保存則については批判する側も一応認めている。しかし、その適用、解釈にクラークとの違いが見出される。

クラークは、脳の活動には優先的にエネルギーが使われがちであり、身体のその他の器官からエネルギーを奪ってしまうと主張する。特に女性の場合は、思春期は生殖器の発達のために膨大なエネルギーが必要であるから、月経時は生殖器の機能にエネルギーを十分行き渡らせるために、学業を休むべきとしている。それに対し、ハウズは、脳の活動が多くのエネルギーを必要とするというところは否定しないが、アメリカ人の神経に過負荷がかかっているのは大学教育の問題ではなく技術の進歩のせいであると主張した。電気や蒸気の発明によって時間と空間の限界が事実上無にされ、思考と活動の限界が拡大されたため、そのことがより幅広い知識とより多様な興味を得ようとする男女の知的能力に厳しいプレッシャーをかけているのだと主張した（Howes 1885, 7）。一方で、月経のある女性でも、良質な栄養を十分に摂取すれば知的活動に足るエネルギーを供給でき、エネルギーの散逸を防ぐことができる。すなわちエネルギーは熱でもあるのだから、それをむやみに放出しないように薄着をせず衣服に気をつければよいという意見もあった（Brackett 1874, 29-30, 39）。エネルギー保存則の身体への援用は認めながらも、女性の月経と高等教育へのクラークの限定的な関連づけに異議を唱えたり、学業を休む以外の他の解決法の提案をしたりしている。自然法則について、クラークの一方的な解釈や適用による主張に対し、彼女たちはより多角的な視野から検討する必要性を迫ったのであった。

3-4. 少数事例の「早急な一般化」と女性自身の経験事例の無視

最後に、恐らくこれが最も重要なことであるが、少数の事例の「早急な一般化」の問題を多くの論者が指摘している。クラークは自身が臨床で診察した女性7例、その他の医師の著述の引用3例のみを、女子高等教育の有害性の具体的な根拠として提示した。それに対して、著述家トマス・ヒギンソン（Thomas Wentworth Higginson, 1823-1911）は「医師のノートからの7例では十分ではない（中略）このことは他のどんな科学の分野でも十分な事実に基づいているとされるとは思えない」（Howe 1874, 35）と批判している。一方、デュフィーも、「特殊な前提から一般的な結論を引き出して」おり、「科学的調査をすれば科学者は厚かましくも世間をだますことはできない」（Duffey 1874, 18-19）と強い調子で非難している。さらに、*Medical News* も「真実、一般的な真実を我々は求めなければならない。個人の経験は誤りがちである。ただ大きな数のみが誤りを排除する」（*Woman's Journal* 1885）と批評した。クラークの女子高等教育論は、生理学の用語を使用することによって「科学らしさ」をアピールしたわけであるが、その論の根拠となる症例の少なさには疑わしさがあったと言わざるを得ない。

また、デュフィーは、クラークの早急な一般化に加えて、女性自身の経験や言葉を無視することに対して大いに不満を漏らした。

> …「彼女が何ができるかを決めるのは誰なのだろう？」というさらなる疑問が生じることを付け加えたい。クラーク医師はアガシ[6]やハクスリー[7]のような科学者でなければならないと言う。（中略）科学者はどうやってその結論にたどり着くのだろう？（中略）なぜ彼女のすべてについて、特にできることの質問に関して、彼女に直接聞かないのだろう？（中略）女性の能力と限界について最もよく知っているのは医師なのだろうか、それとも、女性自身なのだろうか（Duffey 1874, 10-12）。

と疑問を呈し、医師の勝手な憶測からではなく、女性の経験に直接照らし合わせ、女性の可能性について検討することを求めている。高等教育が開かれていて、科学に関する知識を持つことができる男性科学者や医師に対し、女性は科学によって解釈される身体を持つにも関わらず、自らの身体と性についての知識から阻害されるため圧倒的に不利であり、かつ言葉がくみ取られず沈黙させられていたのだった。これらの問題について、のちに女性自身の経験事例に基づく大規模な社会的調査によって疑義が呈されることとなる。

4. 女性自身の経験を対象にした社会的調査による「科学的」教育論への抵抗

ほどなくして、デュフィーらの求めるような、疑わしい一般化を正し、男性医師や科学者の推測的な論に対抗できるような女性からの反論が出現した。本節では、反論を主に検討したい。

4-1.『女性の月経時の休息に関する問題』

女性の健康の実態を問う社会的調査に基づいた反論の1つは、医師であり、当時ニューヨーク女子医科大学の教授であったメアリ・パトナム・ジャコービの『女性の月経時の休息に関する問題』（*The Question of Rest for Women during Menstruation*, 1877）である。ジャコービはフィラデルフィア女子医科大学やニューヨーク薬科大学、パリ医学校（Ecole de Medecin）等で学んだ、当時もっとも著名な女性医師であった（Willard and Livermore 1973）。

1874年、ハーバード・メディカル・スクールはボイルストン医学賞（Boylston Medical Prize）をかけて、「女性は月経時に精神的及び肉体的な休息が必要か、そしてそれはどの程度か」というテーマで論文を募集した。申請者の名は審査の際伏せられることから、女性の応募でも公平に判断される可能性があったため、ジャコービは上記の論文を応募することとなった（Walsh 1977, 130）。

ジャコービは1000人の女性に休息と月経に関するアンケート送付し、268人の回答を得て、それをもとに論文をまとめ、「栄養摂取が全く普通の女性にとっては、休息の必要性を当然伴うような、または休息が望ましいとされるような月経の性質というものはない」と結論づけた（Jacobi 1877, 227）。アンケートの結果によれば、少なくとも35％は月経時に全く不快症状を感じておらず、痛みがあってもわずかであるか時折である女性を含めると、半数以上が月経でも日常の仕事に支障はない（同上 27、58）。すなわち全ての女

性が月経時に休息が必要なわけではないことを見出すことができる。クラークの場合は、すべての女学生に一律に月経時には休息をとるように求めているが、それに対し、ジャコービは痛みのある時は休息できることが望ましいとしている（同上 59）。また、全体の46%が月経時に困難を感じているが、彼女は、それについて、職に就いていないことや、子ども時代や思春期の体育教育の不足などとの関連を指摘した（同上 60-61、226）。ジャコービの調査結果は全くクラークの想定とは異なっており、月経時に休むという教育方法ではなく、若いころに体育教育を受けることや、成長してからは職に就くことなどが健康的な月経にとって良いということを示唆することとなった（2009年11月訂正）。

ジャコービの論文は1876年に賞を勝ち取り[8]、女性の健康について知る重要な資料となり、のちの大学女子卒業生協会の調査分析にも貢献することとなる。

4-2.『大学女子卒業生健康統計』

4-2-1. 大学女子卒業生協会の試み

ジャコービに続いて、1885年には大学女子卒業生協会より『大学女子卒業生健康統計』(*Health Statistics of Woman College Graduates*) が世に出された。『大学女子卒業生健康統計』はカレッジや総合大学 (university) の女子卒業生の健康状態を追ったアンケートのデータを掲載した報告書である。

大学女子卒業生協会は、現在も続いている女性団体であるアメリカ大学婦人協会 (The American Association of University Women) の前身である。1882年に、高名なフェミニストで女子教育の擁護者として知られるエミリー・タルボットを母に持つマリオン・タルボット (Marion Talbot, 1858-1948) を中心として、各地に散在し、なかなか協力の機会を持つことのできなかった大学の女子卒業生のために設立された。長年活動の中心であったマリオンによれば、この調査は高等教育が女性の健康を脅かすとしたクラークの言説をテストするためのものであった (Talbot and Rosenberry 1931, 116-118)。調査の中心となった「健康統計委員会」(Committee of Health Statistics) の設置は協会設立と同じ1882年であり、数ある委員会の内でも早く、協会の女子学生の健康に対する関心の高さが窺われる。

「健康統計委員会」は1882年に、協会に所属する1290名の大学の女子卒業生に健康状態などを問うアンケートを送付し[9]、705名の回答を得た (回収率約54.7%)。高い回収率は女性たちの関心の高さを示している。その回答数の多さは *Woman's Journal* によって、信頼に値する推論への第一歩であると評価された (*Woman's Journal* 1885)。

そのプロジェクトはマサチューセッツ労働統計局長キャロル・ライト (Carroll Davidson Wright, 1840-1909)[10] の目に留まり、彼はアンケートが国家にとって大きな価値があると考え、作表し出版することを申し出た (Talbot and Rosenburry 1931, 119)。彼の多大な協力を得てアンケートはまとめられ、委員会によって分析が加えられた。ライトは後述する『ボストンの女子労働者』(*The Working Girls in Boston*, 1884) や、『大都市の働く女性』(*Working Women in Large Cities*, 1889)、『アメリカにおける結婚と離婚に関するレポート、1867-1886』(*A Report on Marriage and Divorce in the United States, 1867-1886*, 1889) など、いくつかの女性に関わる調査に携わるような、女性に対する社会的調査に関心の高い人物であった。

この報告書は2部からなっている。1部は「健康統計委員会」委員長であるアニー・G. ハウズによる調査結果に対する分析と見解であり、2部はアンケート結果をマサチューセッツ労働統計局によってまとめられた表や比較表、局長ライトによるレビューが掲載されている。

4-2-2.「健康統計委員会」委員長ハウズの見解

アンケートの調査結果に基づく統計データからもたらされた、「健康統計委員会」委員長ハウズの見解を考察しよう。ハウズはまず、最も興味深い調査結果は現在の健康状態であるとし、excellent (優れている)、good (良い)、fair (まあまあ)、indifferent (普通)、poor (悪い) のうち78%以上がgood以上であることを示している。またfairまで入れると83%に上昇し、よって17%がindifferent以下の健康状態であると言えるとしている。しかし、回答者705名のうち20%の140名が入学時indifferent以下の健康状態だったということから、大学教育が元々それほど健康状態のよくなかった少女にはむしろ良い影響を与えていると考えることもできるとしている (Howes 1885, 9)。

ハウズは大学卒業生のデータを女性一般やほかの職業のデータと比較すべきと考えた。女性の健康に関する調査統計は乏しい状況であったが、幸い、前述のジャコービの『女性の月経時の休息に関する問題』と、マサチューセッツ労働統計局が1884年に出版した労働者女性の総論『ボストンの女子労働者』が役に立った。ジャコービのものは268人の女性に月経にまつわる健康状態をアンケート調査したものであるが、ジャコービの調査対象者の女性たちは階級も生活状態も限定されていなかったため、ハウズは対象者は平均的な女性と捉えてもいいだろうと考えている。その調査の結果において、56%強が良好な健康状態 (good health) であるとされていたことと比較し、ハウズらが行った調査では78%がgood以上であったことから、22%も女子卒業生の方が平均的な女性よりも良好な者が多いということになる。また労働者階級の調査である『ボストンの女子労働者』については、1884年のマサチューセッツ労働統計局のボストンの労働女性の健康状態の調査が含まれており、それは1032名の回答があったという。『ボストンの女子労働者』によれば、仕事を始める前は92.2%がgoodだったが、調査の行われた時点では76.2%がgoodであった。よってこの階級の少女は仕事を始めてから16%の人が健康を損なったことになる。それに対して、女子卒業生は入学時は78.16%がgood以上であったが、調査の時点では77.87%と、good以上の者の比率に0.29%の減少が見られた。ハウズは労働者階級と比較してその下がり幅は非常に少ないことを見出した（同上 10）。ここでは、クラークが工場の女子労働者はあまり脳を使わないため強健である(Clarke 1874, 133-134)として考慮の対象外としたこととは対照的に、女性の健康という問題は（2009年11月訂正）むしろ労働との関連のほうが深刻であることが示されることとなる。このことは、クラークの主張は現実にはそぐわないものであったことを裏付けた。

全体として報告書の結論は、「女性がカレッジの教育を追及することは、それ自体で健康悪化を引き起こしたり、生命エネルギー (vital force) の重大な機能障害を起こしたりすることはない」(Wright 1885, 77) ということであった。

4-2-3.『大学女子卒業生健康統計』の問題点と意義

しかし、この報告書の欠点として、クラークが重視した生殖との関連の項目の分析はやや粗くなっていることは否めない。卒業生705名のうち既婚の卒業生は196名で、そのうち子どもがいるのは130名であり、既婚の66.3%に子どもがいることになる。その女子卒業生の家族状態の報告で、女子学生の生殖に関する不安は和ら

げられるだろうとハウズは言う（Howes 1885, 17）。女性一人あたりの生存している子どもの数は2.1人であり、子どもの93.2％が健康（good health）で、死亡した子どもの割合に関しては11.7％である。ハウズは子どもの死亡率の低さと、健康状態の良さが大学の学業によって母性が損なわれなかったという強い証拠になるとしている（同上）。しかし、比較できる乳幼児死亡率を全く引かずに述べることには問題があるだろう。

また月経に関する項目であるが、ハウズは月経時の健康状態などについては分析をしていない。統計結果をまとめコメントを加えている労働統計局長ライトも、月経に関わるトラブルのうち反射痛、泌尿器の痛み、月経不順のみをとりあげ、成長期と在学中、卒業後、全人生の期間でその数の変動をまとめているが、全くトラブルを経験していない女性は24％であるとしているのみであり（Wright 1885, 33, 65）、クラークの論議が月経に大きく関わる問題だっただけにやや拍子抜けの感はある。

この報告書はすぐに教育哲学者ジョン・デューイ（John Dewey, 1859-1952）によって評価、検証されたが、彼も月経に関する項目の不備について指摘している。報告書によれば、初潮の発来した年齢の平均は13.6才であり、カレッジ入学平均年齢は18.3才である。また、初潮後1、2年後にカレッジに入学した女子は20.5％が病弱（poor health）であり、3、4年後に入学した女子は病弱であるのは17.7％である。さらに、初潮後5年以上後に入学した女子の場合は15.4％である。つまり、初潮とカレッジ入学の年齢が近いほど病弱になる可能性があることを指摘している（Dewey 1885/1969, 65, 1886/1969, 74）。その原因は明らかでなく、女子が平等に健康であるために、女子学生の何が健康の阻害要因であるのか、またそれは取り除けるものなのかということに答えるような、環境などのより詳細なデータが必要であるとする。さらに、生殖機能に限定して関連する議論をするべきであるとし、女性の身体の特性に、より焦点を当てるべきだとした（Dewey 1886/1969, 79）。デューイはこの調査の分析や調査項目等の欠陥を認め、幾分、楽観的な解釈に過ぎることについては指摘しているが、次の調査に続くようなモデルを提供したとして高く評価している（同上 79）。

確かにデューイの指摘するとおり、大学女子卒業生協会は曖昧に基準を作っていることが多く、例えば、在学中の勉強の程度を時間数ではなく、“moderate” や “severe” など、曖昧な単語を使って質問していることなどが問題である。加えて、数字の分析はやや荒く、女子学生に敵対的な言説に反論したいがためにやや短絡的に述べていると思われるところが多い。しかし、多人数のアンケートによって、全体としてカレッジや大学を卒業した女性たちの8割近くが健康であることが証明され、クラークの一般化が決して妥当なものではないことを裏付たことは確かであり、反論に統計的根拠を提示する試みは評価できるだろう。

ハウズらは「高等教育は女性の身体的健康に有害か否か」という大きな問題に取り組んだわけであるが、その結論として、「我々は医師らのノートや社会学者の理論には当惑せずに、否、と最終的に答える。我々は疑いのない705名の大学女性の経験から、彼女たちは身体的強さを損うのではなく完全に獲得したという答えを出した」と誇らしげに述べている（Howes 1885, 9）。そこには、多くの論者が指摘したクラークの誤り、すなわち少数の例から強引に一般化が行われているという点に対し、社会的調査による統計的事実をもって反論できたという自負が込められている。クラークの警告は、その臨床的経験と「科学らしさ」によって評価され、多大な影響を及ぼしたが、実際の高等教育を受けた女性たちの実態が、女子教育の有害性という論に有効な反撃を加えることとなった。

5. おわりに

クラークの男女別学の主張は、伝統的な男女別領域のイデオロギーを「科学」というオブラートに包んだものであった。月経不調に関する少ない事例の原因を推論に基づいて解釈し、その結果を「科学」として提示することの問題性があった。深刻な問題をはらんでいるにも関わらず、一定程度社会に受け入れられたのは、彼の医者や教授としての経験と権威があったからであった。身体に関する専門家であり、有名大学の教育者でもあった人物の影響力を考慮すると、自身の信念を「科学」として大衆に伝えることに対し、より慎重で厳しい姿勢がとられるべきであっただろう。さらに、歴史的背景として、1870年代は月経のメカニズムはよくわかっておらず、それゆえさまざまな憶測で解釈がなされていた。当然、その機能の目的について、解釈するもののバイアスがかかる。クラークの事例は、医学の専門家であるはずの人物でも、ジェンダーに関する話題となると推論的になってしまい、またそれが社会に受け入れられるという、ジェンダー問題の根深さを表している。歴史家のラセットは様々な資料から、19世紀の性に関する科学が非常に男性主義的であることを論じたが（ラセット 1994）、クラークの論はその特色を色濃く表すものの一つである。

一方で多くの反論者は、女子高等教育と健康悪化の強引な関連付けを非難し、クラークとは反対に教育不足による健康への害を説いた。また、エネルギー保存則のような自然法則の一面的な適用の仕方に異議を唱え、少数事例の早急な一般化の問題を指摘した。のちに、医師ジャコービや大学女子卒業生協会らによる、多数のサンプルを動員した社会的調査が明らかにした結果によって、クラークの仮説が事実にはそぐわないことが証明されることとなる。

この論争の展開は、「科学」を標榜する言説が人々に容易に受け入れられる背景には、医師や科学者の社会的地位の高さという、言説を支える権力の構造があることを物語っている。権威ある男性医師であり教授である人物による発言であることが、言説に権力を持たせた。その権威によって教育に介入することにより、女性たちを結果的に抑圧した。また同時に、科学的知識という権力をもつ男性と、そこから排除されている女性というジェンダー構造の問題があることを示しているだろう。クラークの発言内容自体に、女性を知識から排除するべしというイデオロギーが含まれており、ジェンダー構造の再生産を担うものとなっていた。

1870年代は、女性の高等教育進出に伴って伝統的な男女別領域が崩れ始めたことに対し、男女の領域を生理学という新たな観点から見直させることによって、構造を維持しようという試みが、科学の価値の高まりと相まって影響力を持った時代であった。しかし、この問題は現代にも続く問題である。「科学的知識」を用いる者のジェンダーバイアスの問題、政治的意図の問題は形を変えて残り続けている。我々はそうした言説の裏に隠された意図を読み解いていく必要があるだろう。

本論では、ジャコービや大学女子卒業生協会が明らかにしたような、労働と健康の問題についてより踏み込むことができなかったため、同時代のクラーク以外の医師や科学者の女性の健康と労働に関する言説をより幅広く精査することを今後の課題としたい。

注

1. 1877年のクラークの死亡記事では、「この書は戦闘へのトランペットの合図のようなもので、未だに止まない論争を開始した」と紹介されている（Obituary of Edward Hammond Clarke, *Boston Advertiser*, December 5th,1877）。
2. 初版は1873年であるが、本論で参照したのは1874年のものである。「第5版への覚書」が掲載されていることから5版以降であることは確かであるが、残念ながら版の明記がなく、版が特定できなかったことをお断りしておく。
3. M. Carey Thomas（1908）"Present Tendencies in Women's College and University Education," *Educational Review* 24,（1908）: 68, quated in Rosalind Rosenburg, *Beyond Separate Spheres*（New Haven and London: Yale University Press, 1982）, 12.
4. コロンビア大学は1889年にバーナード・カレッジという付属女子大学を併設することとなる。このように共学化の代替案として、女子大学を併設する動きは特に名門大学に見られた。ブラウン大学では1892年にペンブローク・カレッジを開校、ハーバード大学は1879年に「ハーバード・アネックス」という女子校を作り、1894年に同校はラドクリフ・カレッジとして認可された。
5. 最初に大学で女性を受け入れたのはオバーリン・カレッジで、1837年のことである。
6. Jean Louis Rodolphe Agassiz（1807-1873）は生物学者。ハーバード大学動物学・地質学教授。化石魚類の研究や氷河期の発見で有名（科学者人名事典より）。
7. Thomas Henry Huxley（1825-1895）は生物学者。元イギリス軍医で、腔腸動物の研究が認められ、王立協会会員に選出された。ダーウィンの進化論の擁護者として有名（同上）。
8. しかしハーバード大学は受賞論文の出版を拒否した。ジャコービは幸いにも1877年に親族の出版社から論文を世に出すことができた。
9. アンケートを送付した女性の出身大学は12大学で、そのうち共学はボストン大学、コーネル大学、カンザス大学、マサチューセッツ工科大学、ミシガン大学、オバーリン・カレッジ、シラキューズ大学、ウェズレイアン大学、ウィスコンシン大学であり、女子大学はスミス・カレッジ、ヴァッサー・カレッジ、ウェルズリー・カレッジであった。
10. Carroll Davidson Wrightは統計学者で、当時マサチューセッツ労働統計局長であり、後に米国科学振興協会（American Association for the Advancement of Science）の会長を務める人物である。

引用参考文献

一次資料

Atlantic Monthly（1873）Review of Clarke's *Sex in Education*. Recent Literature. Vol. 32, Issue 194, December, 737-740. Cornell Making of America, http://cdl.library.cornell.edu/moa/.

Brackett, Anna C.（1874）"The Education of American Girls." In *The Education of American Girls: Considered in a Series of Essays*. Edited by Anna C. Brackett, 11-116. New York: G. P. Putman's Sons, Women Working, http://ocp.hul.harvard.edu/ww/.

Clarke, Edward Hammond（1874）*Sex in Education; or, A Fair Chance for Girls*. 5th edition? Boston: James R. Osgood.

---.（1878）*Visions*: *A Study of False Sight-Pseudopia*. With an Introduction and Memorial Sketch by Oliver Wendell Holmes. Boston: Houghton, Osgood.

Comfort, George F. and Anna Manning Comfort（1874）*Woman's Education, and Woman's Health: Chiefly in Reply to "Sex in Education."* Syracuse: T. W. Durston. Women Working, http://ocp.hul.harvard.edu/ww/.

Dewey, John（1885/1969）"Education and the Health of Woman" in *John Dewey, The Early Works, 1882-1898*. Vol. 1: 1882-1888. Result of a cooperative research project at Southern Illinois University. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois Press, London and Amsterdam: Feffer and Simons, 64-68.

---.（1885/1990）"The Health of Women and Higher Education" in *John Dewey, The Later Works, 1925-1953*. Vol. 17: 1885-1953. Edited by Jo Ann Boydston, Barbara Levine and Richard W. Field. With an introduction by Sidney Hook. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois Press, 7-9.

---.（1886/1969）"Health and Sex in Higher Education" in *John Dewey, The Early Works, 1882-1898*. Vol. 1: 1882-1888. Result of a cooperative research project at Southern Illinois University. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois Press, London and Amsterdam: Feffer and Simons, 69-80.

Duffey, E. B.（1874）*No Sex in Education, or, An Equal Chance for Both Girls and Boys*. Philadelphia: J.M. Stoddart.

Howe, Julia Ward, ed.（1874）*Sex and Education: A Reply to Dr. E. Clarke's "Sex in Education*. Boston: Roberts Brothers.

Howes, Annie G.（1885）"Report of the Committee on Health Statistics." In *Health Statistics of Women College Graduates: Report of a Special Committee of the Association of Collegiate Alumnae*. Annie G. Howes together with statistical tables collated by the Massachusetts Bureau of Statistics of Labor. Boston: Wright and Potter Printing, 5-18. Women Working, http://ocp.hul.harvard.edu/ww/.

Jacobi, Mary Putnam（1877）*The Question of Rest for Women during Menstruation*. New York: G.P. Putnam's Sons.

Maudsley, Henry（1874）"Sex in Mind and Education." Reprinted in *Men'sIdeas/ Women's Realities; Popular Science, 1870-1915*. Edited by Louise Michele Newman. New York: Pergamon Press, 1985, 77-86.

Nation（1885）'The Health of American Women.' 8th October: American Association of University Women Marion Talbot Archives.

New-York Medical Journal（1873）Review of *Sex in Education; or, a Fair Chance for the Girls*, by Edward Hammond Clarke, M.D.. Bibliographical and Literary Notes. Vol. 18, 636-639.

Talbot, Marion and Lois Kimball Mathews Rosenberry（1931）*The History of The American Association of University Women, 1881-1931*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company: American Association of University Women Marion Talbot Archives.

Whitehead, James（1854）*On the Causes and Treatment of Abortion and Sterility : Being the Result of an Extended Practical Inquiry into the Physiological and Morbid Conditions of the Uterus, with Reference Especially to Leucorrhoeal Affections, and the Diseases of Menstruation*. 2nd American edition. Philadelphia : Blanchard & Lea.

Woman's Journal（1885）'Health Statistics of Women.' 17th October: American Association of University Women Marion Talbot Archives.

Wright, Caroll D.（1885）"Health Statistics of Female College Graduates." In *Health Statistics of Women College Graduates: Report of a Special Committee of the Association of Collegiate Alumnae*. Annie G. Howes together with statistical tables collated by the Massachusetts Bureau of Statistics of Labor. Boston: Wright and Potter Printing, 19-78. Women Working, http://ocp.hul.harvard.edu/ww/.

Youmans, E. L.（1874）Review of *Sex in Education* by Dr. Clarke, Scientific Miscellany. *Galaxy*, Vol. 17, Issue 1, January, 126. Cornell Making of America, http://cdl.library.cornell.edu/moa/.

二次資料

Daintith, John, Sarah Mitchell, Elizabeth Tootil and Derek Gjersten, eds.（1994）*Biographical Encyclopedia of Scientists*. New York, N.Y.: Facts on File Inc.（科学者人名事典編集委員会編［1997］『科学者人名事典』東京：丸善。）

Fee, Elizabeth（1976）"Science and the Woman Problem: Historical Perspectives." In *Sex Difference: Social and Biological Perspectives*. Edited by Michael S. Teitellbaum. New York: Anchor Press,175-223.

---.（1978）*Science and the 'Woman Question', 1860-1920: A Study of English Scientific Periodicals*. PhD. Dissertation, Princeton University.

Laquer, Thomas（1990）*Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud*. Harvard University Press.（ラカー、トマス［1998］『セックスの発明：性差の観念史と解剖学のアポリア』高井宏子、細谷等訳、東京：工作舎。）

Newman, Louise Michele, ed.（1985）*Men's Ideas/ Women's Realities; Popular Science, 1870-1915*. New York: Pergamon Press.

---.（1999）*White Women's Right: The Racial Origins of Feminism in the United States*. New York and Oxford: Oxford University Press. http://digital.library.upenn.edu/ebooks-public/pdfs/0195086929.pdf.

Rosenberg, Rosalind（1982）*Beyond Separate Spheres: Intellectual Roots of Modern Feminism*. New Haven and London: Yale University Press.

---.（1999）"'The Woman Question' at Columbia: From John W. Burgess to Judith Shapiro.": http://beatl.barnard.columbia.edu/cuhistory/archives/Rosenberg/woman_question.htm（2007/06/10 アクセス）.

Russet, Cynthia Eagle（1989）*Sexual Science: Victorian Construction of Womanhood*. Harvard University Press.（ラセット、シンシア・イーグル［1994］『女性を捏造した男たち―ヴィクトリア朝の性差の科学』上野直子訳、東京：工作舎。）

坂本辰朗（2002）『アメリカ大学史とジェンダー』東京：東信堂。

Walsh, Mary Roth（1977）*Doctors Wanted, No Woman Need Apply: Sexual Barriers in the Medical Profession, 1835-1975*. New Haven: Yale University Press.

Willard, Frances Elizabeth and Mary Ashton Rice Livermore, eds.（1973）*American Women: Fifteen Hundred Biographies with Over 1,400 Portraits: A Comprehensive Encyclopedia of the Lives and Achievements of American Women during the Nineteenth Century*. Newly rev. with the addition of a classified index. New York: Mast, Crowell & Kirkpatrick. Detroit : Gale Research Co.

横山美和（2007）「19世紀後半アメリカにおける『女性』の構築と科学言説―E.クラークの女子高等教育論を中心に―」『F-GENS ジャーナル』7号、東京：お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」（F-GENS）、273-279。

Zieff, Susan Gail（1994）*The Medicalization of Higher Education: Women Physicians and Physical Training, 1870-1920*. PhD. Dissertation, University of California, Berkeley.